

でもなく、悪魔でもなく、ただの人間であるにも関わらず、その仲間に入れてもらえない居心地の悪さは、生まれつき少年の隣人のようなものだった。

男は少年の心臓の音を聞き取ったように、甘い笑顔を浮かべ、身をかがめ、バルコニーに片膝をついた。自分の頭が、少年と目が合う高さになるように。

「つらいのだね」

「……………」

「君は苦しんでいる。この世界そのものに。自分の身の置き場のない場所に」

「……………」そんなことは……………」

「私に嘘をつく必要はないよ。すぐにわかる。それで、どうだね？ 君はそんな世界に、もううんざりしているのではないのかな。何もかも嫌になって、投げ出したくなってしまったことがあるのではないのかな？ さきほど私の耳に届いた『悪魔のトリル』には、天上の美しさだけではなく、君の悲嘆もこめられていたように思うよ。違うかな」

己を見上げる青い瞳に、少年はたじろいでいたが、男は引かなかった。ただ甘いお菓子を次々に差し出すように、微笑みながら言葉を続けるだけだった。

『忘れこのKはごまりの生誕節』刊行記念

忘れこの

DHAMPIR "K"
IN THE DARKNESS

辻村七子 装画／高嶋上総

集英社 オレンジ文庫 NOT FOR SALE

Featuring
宝石商リチャード氏の謎鑑定

悪魔のトリル



「おたまたまの音の響きだのさ。うん。」

「すまじいって、音の響きをさせるってのは悪魔、おまじい中のじいさん……………」

たまたまの音の響き、おまじい音の響き、おまじい音の響き……………」

たまたまの音の響き、おまじい音の響き……………」

「さあ、おまじい音の響き……………」

たまたまの音の響き……………」

たまたまの音の響き……………」

「……………」

「……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

……………」

天使がヴァイオリンを弾いていた。

花の都と呼ばれるイタリアの古都、英語ではフローレンスと呼ばれる街で。

金髪の少年が、夕空の下、かつては貴族のものであった屋敷のバルコニーで、子ども用のヴァイオリンを操っている。

夕焼けの空と同じ色をした丸屋根。土煉瓦の壁。

その全てに、技巧的な弦楽器の音が染み通っていった。

観客の姿は、ない。

少年はただ、街に向けて音楽を奏でていた。

演奏を終えると、少年は眼下の街に向かってべこりと頭を下げた。

唐突に、背後から拍手の音を受けて、少年はびっくりとした。

「ブラーボ。すばらしい。まるで音楽の精だ。君はばつぐんの腕の持ち主だね」

ぱち、ぱち、ぱち、と芝居がかかった様子で手を叩きながら、男は暗闇の中から出てきた。まるで闇から輪郭が浮かび上がってきたような、脈絡のない登場だったが、きつとお屋敷の人であろうと、少年は冷静に考えていた。

「……あなたはここにいますか？」

「……あなたにもそういうことが？」

「もちろんさ。ほら、私も美しいだろう。だが私の場合は、『悪魔だ』と言われることの方が多いかな」

「さあ笑ってくれ、と言わんばかりに、男は両腕を広げたが、少年は笑えなかった。天使

「……なのさ、たいていおんなは……」

少年は少くも、たいていおんなは……

「……私は、永遠には、生きない動物です。人間ですから……でも、もし、永遠に生きていたら、とても寂しいと思います。私は……だって、それでは、友達と呼べる相手がない……」

「友達？ 君には友達がたくさんいるの？」

「……あまり、いません。なので……今でも寂しいことがあります。もしこのまま、永遠に生きていたら、私は……永遠に寂しいのではないのでしょうか」

「では、悪魔との契約で、その寂しさが解消されるとしたら？」

「え？」

少年は目を見開き、男は歌うように語り続けた。

「悪魔はきつと君にこう言うだろうな。最高の友達を約束しよう。永遠に君の傍をはなれず、裏切らず、愛情を注ぎ、互いに支え合える、夢よりも夢のような友情を。トロイの王子バ

励ましてくれたつながりで、今日も彼らとお会いすることになった、旅先で出会ったありがたい人たちだ。

今回は俺の上司兼友達の、リチャード・ラナシンハ・ドウルピアン氏も一緒に。

「……」

今日も昨日と同じく、けぶるように美しい俺の上司は、チェスの名手であったガブリエー

レさんと一緒に、レジデンスのバルコニーに小さなテーブルを持ち出して、黒と白の駒を戦わせていた。俺にはまだよくわからない世界だが、リチャードと互角に渡り合えるのだから、ガブリエーレさんは相当のやり手であると思われる。マインドゲームが大好きだというクレアモント家の三兄弟——血縁上は本当の兄弟ではないが、実際にはそれ以上のものだと俺は思っている——の中で、一番強いのがリチャードだそうなのだ。

俺と悟さんといえば、小さなキッチンで、激戦を繰り広げる二人のためにおやつを作っていた。スキアッチャータという、干し葡萄のたくさん入ったひらべったいケーキだ。フィ

レンツェの田舎の名物だというケーキを、悟さんは危なげない手つきで焼いていた。俺はそのアシスタントである。

「二人とも楽しそうですね」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

昼のにぎわいを失い、しんと沈黙を保っている。

いつかこの街に、また帰ってくる事ができたらいいのに。

できれば同じ相手と一緒に。

悟さんや、ガビーさんのところに。

そんなことを思いながら、俺は箱庭の中の人形のように、古い街の中を巡り続けた。

手？ 四手……？」

「ガビー、もう降参しちゃいなよ。スキアッチャータも焼けるよ」

「やかましい！ 俺は考えてるんだ！」

「はいはい」

その五分後、結局ガビーさんは降参した。リチャードはもう何手も前から、白のキングを追い詰めていたのだ。表面上は笑っているものの、けつこうショックを受けている様子のガビーさんの前で、得意げな猫のような顔をする上司を、俺は軽く小突いた。

「おい、俺たちは、『お客さん』だぞ。わかってるだろう」

「わかっておりますとも。少々楽しくなつてしましまして、盤上で羽目を外しただけです」

「……今日、なんか、イケイケだな？」

「いけいけ？」

「いや、何でもないよ。後で話そう」

それから俺たちは、再び食卓を囲んだ。スキアッチャータは三センチくらいの厚みに焼けた。パウンドケーキに近いが、よりしっとりしていて、家庭の味という感じがする。フルー

たし辞書を引く。俺、時、書かれた。……

底の数の、……「とせせせせ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

